

雲中供養菩薩像

ヒノキの木から彫られた52体の菩薩像が、阿弥陀堂の内部の壁を、阿弥陀如来の周囲に浮かぶように飾っています。菩薩は悟りに達しましたが、他者を助けるために成仏を後回しにしました。浄土仏教では、の死にゆく信者を西方極楽浄土へ導くために阿弥陀が現れたとき、菩薩が阿弥陀と一緒にいるとされています。かつて阿弥陀堂には52を超える菩薩像があったと言われています。現在、26体のオリジナルの彫像が博物館に飾られており、それらのレプリカは残りの26体と共に阿弥陀堂に飾られています。

菩薩はそれぞれが個性的です。52体のうち28体が笛やシンバルなどの楽器を演奏しており、他にも、天蓋や蓮の葉に座った姿で仏陀の装飾品を描いたものもあります。また、踊りや合掌の姿のものもあります。動作に関わらず、すべての像が、細い雲とスカーフを背後にたなびかせ、無限の動きを伝えています。

これらの神聖な像に彫刻、絵付け、塗装、金箔などの装飾を施したのは、時代を代表する仏師定朝（?-1057）が率いる職人の一団でした。像のブロンズの光背のオリジナルの色は色あせてしまっています。一体のみフルカラー復元したレプリカが平等院の博物館に収められており、数千年前の本来の姿を現代によみがえらせています。